

1.4 誤解を解く、ということはどういうことか

近藤真理子（コンマリ）さんの‘物事の片付け’は誤解を考える上で大変参考になります【文献2】。片づけの対象は洋服、新聞切抜き、本、書類、など具体的なものですが、誤解は目に見えない抽象的なものなのです。コンマリさんにならって、「誤解を片づける」とはどういうことか、考えてみるのは大変示唆的なことです。コンマリさんは「心がときめかないものは思い切って捨てよ」といっています。ここでは洋服などを捨てるのと違って、人は誤解を単に捨てるだけで終わってはいけません。捨てる代わりに代わりのものを見つけてこないと正しく捨てたことになりません。代わりを持ってこないと気が済まないのは普通の気持ちです。誤解を捨てるとは代わりの物を持つてくること、これは切り離すことができないコインの裏と表の関係のような気がします。古い誤解は記録に残すだけで、新しい代替物は持ち主の世界観を広げるものでなくてはならないでしょう。話を例の 1mSv にとってみましょう。年間 1mSv は低線量被ばくです。その程度の被ばくは全く健康障害をもたらしません、と多くの専門家は言っています。放射線治療でどれだけ多くの命が助かっているかを思えば、この専門家の意見は信頼がおけます。しかし、例えば幼児を持つ母親は、子供を 1mSv の被ばくから必死に守ろうとします。その心は何でしょう。それは、「1mSv が健康障害をもたらしませんというのは統計上のことで、私の子供はもしかしたら例外的障害を起こすかもしれない」という懸念を打ち消すことができないからでしょう。失礼ながらこういう人を‘万が一問題の人’と呼ぶことにします。「万が一起こることにこだわる人」という意味です。科学は、物事の秩序に関する真実を明らかにしますが、息子の健康障害に関して 100%正しい予測をすることはできません。母親は直観的にこの科学の限界を知っているので万が一問題を気にかけるのです。専門家がこれを‘何を馬鹿な!’と一蹴することはできないし、許されません。これは気持ちの問題なのです。この万が一問題の人が、説得によって「この 1mSv の被ばくは健康障害をもたらしませんかもしれない」という懸念を捨てるとしたら、代わりに何を獲得したらよいのか、これがこれから検討する問題の核心です。これは人間の感情が絡むから回答を導き出すのは簡単ではありません。このような問題は普遍的な問題であって、何も 1mSv の問題に限りません。これは物理現象を教科書に基づいて誤りを正すのとはわけが違うことは容易に推測できます。心の動きに着目しなければならぬからです。これに答える考え方の一つとして、比喩的に‘登山電車方式’を提案しています。